フィリッポ・リッピの スポレート大聖堂壁画に関する一考察 — 《受胎告知》を中心に —

慶應義塾大学
渡辺有美

本発表は、最晩年のフィリッポ・リッピ (ca.1406-1469) および工房がスポレート大聖堂内陣に描いたマリア伝壁画 (ca.1466-69) から、《受胎告知》を取り上げる。主題解釈の方法としては図像に関する考察を中心に、注文主を含めた社会的背景を視野に入れつつ検討する。本作品は、一般的なフィレンツェの同主題では通常見られない特異な点を有している。すなわち、砂時計の存在である。本場面に描きこまれた砂時計は、それがほぼ現状では消えかかっているため、これまでフィリッポ研究では言及されたことがなかった。そこで、本発表ではとりわけ砂時計に焦点を当て、なぜ「受胎告知」では殆ど描かれることのない砂時計が本来ならば非常に目立つ場所に置かれたのかについて検討する。

この理由を探るため、まず「受胎告知」をはじめとして、砂時計が描かれたいくつかの主題を概観する。その中でも第一にフィリッポと同じ同時代の「受胎告知」作例を確認し、第二に砂時計が描かれたその他の主題を取り上げる。具体的に示されるのは、「節制」の寓意のアトリビュートとしての砂時計、書斎の場面に描きこまれた砂時計である。その上で、フィリッポ作品における「砂時計」の意味と役割（機能）を考察する。宗教的・社会的な背景と関連して興味深いのは、14-5世紀にかけての聖ヒエロニムス崇敬であり、同聖人を取り扱った「書斎の聖ヒエロニムス」の主題にしばしば砂時計が描かれたことである。本壁画の砂時計描写には、スポレート大聖堂司教で枢機卿であったベラルド・エローリ (1409-1479) が関与していた可能性を提案する。エローリは、フィリッポ・リッピの壁画伝のために最初の支払いを行った人物であり、歴代の教皇たちから寵愛されていた人物であった。聖ヒエロニムスへの崇敬には、このエローリを取り巻く高位聖職者たちも関与しており、従って、博学なエローリが「受胎告知」の主題では特異な砂時計の描写を促した可能性を示す。

同時に、本大聖堂は聖母に捧げられていた聖堂であり、マリア伝の一部として本主題が描かれている。それゆえ、砂時計を本マリア伝壁画の最初の物語である《受胎告知》場面の顕著な場所に置くことにより、神の時が満ち、贖いの歴史の始まりを暗示すると共に、救済史に深く関わることとなった聖母の存在を強調し、聖母の性質としての徳をも示したことを明らかにする。以上、この発表は、スポレート大聖堂マリア伝壁画の一部である《受胎告知》場面における砂時計の意味を、同時代の社会的背景を鑑みた上で提案するものである。